NO.351

ARCHITECT

2017. 12. DEC.

CONTENTS

自作自演217 …… 大矢雅祥・牛尾　彰・平野信義…… 2

東海とっておきガイド㊽三重編…… 加藤幸範…… 3

第2回　木造建築の語られ方

木造建築を動員せよ …… 竹内孝治…… 4

JIA建築家大会2017四国　阿波おどりの国 とくしま大会

…… 関口啓介・宮坂英司・柳澤　力・原眞佐実…… 6

第34回JIA東海支部設計競技　1次審査結果 …… 寺下　浩…… 8

JIA静岡発　建築ウォッチング

第一回建築ウォッチングに参加して …… 秋山　元…… 9

JIA愛知 建築家フェスティバル2017 … 田中英彦・上原徹也・森　哲哉・川口亜稀子……10

理事会レポート …… 車戸愼夫……12

東海支部役員会報告 …… 江川静男……13

保存情報 第193回　旧八百津発電所資料館…… 山上　薫……14

名古屋大学 旧宇宙線望遠鏡室(現音楽練習施設)… 谷口　元……14

Bulletin Board ……15

地域会だより ……15

編集後記 …… 石橋　剛・石川英樹……16

Inspire the Next 9

降旗範行
FULL POWER STUDIO

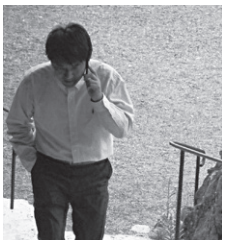
すっかり寒くなり、気が付けばもう12月。今年も残りわずかとなった。表紙の写真は、昨年の大晦日に行われた真宗大谷派名古屋別院、いわゆる東別院でのイベントの一幕である。本堂をキャンバスに、プロジェクターで色彩豊かな幾何学模様を映し出すデジタル掛け軸や、能舞、和太鼓の演奏など、さまざまな魅力的なプログラムが行われ、初鐘とともに新しい年を迎える。私の友人がディレクターを務めるこのイベントは、「大切に受け継がれてきた日本の伝統文化を後世に伝えたい」という主催者の思いが体現され、1年を締めくくるにふさわしい名古屋の新しい年越しスポットとなっている。

本堂への参拝ルートを確保しながら、観客と演者の一体感をつくり上げるため、本堂へ至る階段の踊り場を、まさに演者の「踊り場」＝ステージにしていたことがとても効果的であった。脚光を浴びる演者の後ろ側に回り込むことで、観客の立場だけでなく演者の立場で観客側を見ることができる、ステージ裏のこの場所が特におすすめである。さまざまな視点に立って計画を立てることが空間をつくる醍醐味であると再認識させられた。

5回目となる今年も「東別院初鐘×D-KLiveデジタル掛け軸」が大晦日に開催されます。皆さんぜひお立ち寄りください。

12/31（20:00）～ 1/1（1:30）
東別院初鐘×D-KLiveデジタル掛け軸

踊り場
Leica M9 + Leica Noctilux 50mm/f1.0
E58
（東別院／愛知県名古屋市）



大矢雅祥（JIA静岡）

トランスタイルアーキテクツ（静岡県島田市横井2-9-12　TEL 0547-37-5799　FAX 0547-37-6102）

田中泯の場踊り

田中泯さんの場踊り「ひとつハゲがある」パンフレット

先日、袋井市にある樂土舎・樂土の森で、田中泯さんの場踊り「ひとつハゲがある」を見てきた。会場は生憎の雨。踊り場は、杉木立とそれに沿う擁壁だ。

擁壁にはアルミ箔が65mに渡って貼られている。この銀色に光る壁に沿う小屋の中に数十名の観客がいる。小屋に大きく切り取られたガラスもない開口越しに、雨音だけの世界に田中泯が姿を現す。雨の中、言葉も発せず踊る田中泯に、見る側も徐々に場踊りの世界観に引き込まれていく。雨に打たれながら踊る田中泯と観客側に不思議な緊張感と一体感が生まれ、もはや雨も杉木立も銀色の壁でさえも、この場踊りに必要なものと見えてくる。やがて一体化した場に石原淋の幻想的な音楽が重なり、居合わせた観客の反応を受け即興的な表現がさらに深化していく。見る側には田中泯との間の距離感が縮まっていき、それぞれの思考の中に田中泯の場踊りの解釈が浸透していく。居合わせたものだけが感じることのできる言わば身体芸術と言える。これが「場踊り」の魅力である。

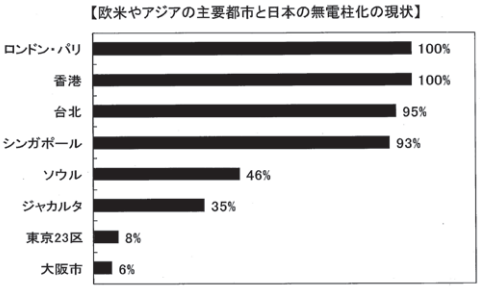
映画やTVでご存知の方が多いかと思うが、「踊り」の本質に鋭く切り込む田中泯さんの独創的なパフォーマンスは、世界的に高く評価されており、日本を代表する舞踊家だ。「場所で踊るのではなく、場所を踊る」と主題とした「場踊り」を各地で展開している。

現在、東京・品川の原美術館では『田原桂一「光合成」with 田中泯』が、12月24まで開催されている。会期中の12月23日には田中泯によるダンスパフォーマンス『オドリ』が開催されるようなので、こちらも田原桂一の展覧会と併せ行ってみようと思う。ぜひ、一度ご覧になってはいかがだろうか。

牛尾　彰（JIA愛知）

丹羽英二建築事務所（名古屋市中区金山2-8-4　TEL 052-332-3501　FAX 052-332-3518）

いまだに空が狭い……“目覚めよ！景観後進国、日本”



日本人が見慣れた風景だと思っている電柱、電線のまち並み。残念ながら海外から見ると近代化に遅れたまち並みです。日本はここまで近代化したにもかかわらず、すっぽりと抜け落ちている部分があります。なぜ電柱を地中化できないのでしょうか。

2016年末の“無電柱化推進法”施行を受け、全国で電線の地中化に向けた国や地方自治体の動きが活発になってきていますが、全く動きが鈍い。欧米はおろか、中韓をはじめとするアジア各国からも大幅に遅れている日本の“無電柱化”。

1995年の阪神淡路大震災では、都市部の電柱の9割が倒れ、救助活動に支障が出たり、通電を急ぐため通電火災が起きたりしました。住宅地でも、電柱が交差点の角にあるため追突事故による死亡率が10倍になるといいます。また電柱が歩道にあると、車椅子の方などにとってもバリアフリーではありません。

終戦直後に、“一時的”という名目で電柱が爆発的に建てられ、その後見直すことなく戦後が70年間残っています。電力会社とNTTがコストを払いたくないからと無節操に電柱でインフラをつくったのが原因です。

以前、日本は満州国の長春で、都市計画家が電柱を地下化しています。先進国で電柱が大量に残っているのは、日本だけです。それどころか今でも毎年7万本増えています。まず、電柱の新設は禁止とすることから始めなければなりません。

変圧器も昨今の競争原理でかなりコンパクトになっています。地価について調べた人の話では、電柱のないまちが4～7%上昇しています。これらの無電柱化への動機付けをビジネスチャンスとし、自治体と電力会社などが中心となって早急に進める必要があります。

平野　信義（JIA 三重）

ARTS（三重県津市大谷町194-8　TEL059-227-1405　FAX059-227-1407）

さあテニス

施主である病院の理事長（現在三重県テニス協会の名誉会長）から、私の体形が「見るからに運動不足である。」とテニスに誘っていただいたのが始まり。

体力には若干自信のあった私は、軽い気持ちでお誘いに乗り、若さゆえ「どうにかなるだろう。」という甘い考えで参加しました。ところが、わざと緩いサーブを打ってもらっても、それを返すこともできず、たとえ当たったとしても、ラケットには上手く当たらずホームランかネットの有り様……。その上、体力的にもしんどく、御年 75 歳のその方の相手にすらなれないことが、悔しくて情けなくてたまらなかった思い出だけが残っています。

そんな苦い思いを抱きつつ、現在はめきめきと上達して（?）、テニスにどっぷりはまっています。テニスの「いろは」がわかったような気になり、TV 中継なども観戦するうちに、トッププロ選手の凄さがようやくわかるようになりました。「あれはとても人間技とは思えない！」その思いは、テニスをやってみて初めてわかることで、その道に入らなければわからないことなのだと思いました 。建築も同じで、その道に入らなければその凄さや素晴らしさが理解できないものですよね。

皆さまは何かスポーツをされていますか？ スポーツは、単に健やかな心身をつくるだけでなく 、心のゆとりを生み出したり 、集中力を高めたり 、ストレスを解消したり 、人とのつながりを深めるといった、人生の楽しみや豊かさを与えてくれます。

まだ、スポーツの素晴らしさを実感できていないあなた！もしよろしければ、一緒にテニスをしませんか？ 僕のテニス仲間には、建築設計に携わっている人は残念ながら一人もいません。ぜひあなたと、テニスの合間に、建築や家族の話なんかして楽しみたいなぁ……。いつの日か、JIA テニス大会や JIA スポーツ大会なんてのを企画して、みんなで参加してみたいものですねぇ。もちろん、第1回テニス大会の優勝者は、僕に決まっていますけどね！

東海とっておきガイド㊽ | 三重編 |

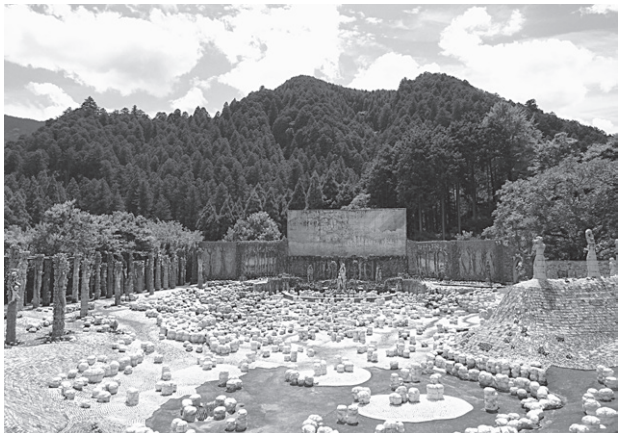
加藤幸範（JIA 三重・プラス設計室）

陶芸空間「虹の泉」

松阪市の山奥、もう少し走れば奈良県というくらいのところにその不思議な空間がある。

圧倒的な作品の数々、35年もの間これらを創作した絶対的な時間量はもとより、その情熱、精神力たるや計り知れない。一人の芸術家がその一生をかけてつくり上げたアートな空間に入るとそこは、水の中のようでもあり、雲の上のようでもある。

ずっと外国を旅してきた作者（東 健次 氏）は39歳のときこの地に戻って制作を始め、以降74歳までの35年間、たった一人でこの空間を陶の作品で埋め尽くした。数年前に作者が亡くなってしまった今、この空間は完成されたのかどうかさえも誰もわからないが、各々の作品からは不思議なパワーを感じずにはいられない。そしてそれは訪れるものがこれを好むか、好まざるかをはるかに超えたパワーである。



陶芸空間「虹の泉」
所在地：
三重県松阪市飯高町波瀬
問い合わせ先：
波瀬むらづくり協議会事務局
TEL：0598-47-0321
入場料：500円

正しい草餅

奈良から伊勢神宮に至る「伊勢本街道」は、かつては西からの参宮者で賑わった道だったそうだが、今ではその影もなくひっそりとしている。

その街道沿いの松阪市の飯南から津市の美杉に抜ける仁柿峠の手前に、知る人ぞ知る名物の草餅がある。

老夫婦が昔ながらの製法でつくられているとのことで、一日の販売数が限られているのか売り切れているときも多く、手に入っただけで少し幸せな気分になる。

決して甘党ではないのですが、この草餅はとっておきの一品だ。

「斉藤正菓堂」
所在地：
三重県松阪市
飯南町下仁柿772-1
TEL：0598-32-2317
定休日：（不定休）

隔月6回連載
第2回
木造建築の語られ方

木造建築を動員せよ

竹内孝治 | 愛知産業大学造形学部建築学科 講師

木造建築の「語られ方」を棚卸しする試み。前回は、木造建築を礼讃するために記紀神話をも持ち出す〈木造愛国〉と、木造建築を日本から一掃しようとまで目論む〈木造亡国〉、この両極に振れる「語られ方」を観察した。その際に取り上げた雑誌『建築と社会』の「木造建築の将来」特集(1930.7)に、実は両極の「語られ方」とは異なる第三の語りが存在する。その語りとは、木造建築の欠点を合理的・科学的に克服し近代化を図る立場だ。ここではそれを〈木造革新〉と名付けてみよう。

そこで第二回目は、戦争と復興の1940年代になされた木造建築の動員について取り上げてみたい。総力戦体制は〈木造愛国〉と〈木造亡国〉の対立を、〈木造革新〉へと「アウフヘーベン」させるとともに、「木造建築の語られ方」がもつ同床異夢な曖昧さを、より際立たせていく。

思考実験としての「国民住宅」

1940年、新体制運動と名付けられたムーブメントは、政治経済はもとより国民一人ひとりの衣食住までも合理的・科学的に整序しようと試みた。物資生活の標準化を通して国民的統合を図る。その実践が「国民服」や「国民食」、そして「国民住宅」だった。当時のいろいろな提案を見てみると、来たるべき「戦後」を夢みた理想路線から、厳しい戦争の現実に対応するため計画された現実路線まで随分と幅があることに気づく。前者は「大東亜の盟主たる日本人にふさわしい住まい」を念頭に置き、後者は「非常時に対応した簡素で合理的な住まい」を模索した。特に後者は、設計基準・規格設計の確立、材料・工法の開発、パネル式組立構造などの工業化といった木造住宅の革新をもたらしたが、それは戦時動員の賜物だった。

さらに「国民住宅」が試みたのが、住宅を群として考えること。元ネタは近隣住区理論やル・コルビュジエ(1887-1965)によるモダニズム都市など。そこで提唱された「住宅は国土計画・地方計画・都市計画に基づいて造られる」という発想が戦時下に持つ意味は、一軒の住宅ですら国防の観点から設計されるということ。規模もプランも構造・材料も設備も敷地計画も、全ては国家のために再編成されていく。

群としての住宅を考える際の最重要事項が防空・不燃化。内田祥文(1913-1946)らによる都市改造案「新しき都市」(1941)は防空・不燃+モダニズム都市の典型例。内田は建築学会主催「国民住宅」コンペでもグランプリを獲得した新進建築家で、父は建築学界に君臨した東京帝大総長・内田祥三(1885-1972)。ただ、興味深いことに提案図面は、微笑ましいほどにル・コルビュジエの「輝ける都市」(1930)にソックリだった。

実際にル・コルビュジエ自身も著書の中で「輝ける都市」は空爆に強く、ピロティは毒ガス対策に、屋上も装甲屋根で耐弾構造になると主張している。いわば「戦時こそモダニズム建築!」というキャンペーン。それは木造住宅が密集する日本にモダニズム都市を実現する布教ロジックとしても機能し、そのモデル提案が「新しき都市」というわけだ。若き建築家・内田祥文は、空襲が続く首都東京にあって、「爆撃するのをためらうぐらいの美しい都市をつくりたい」と語った。日本にル・コルビュジエの都市が降り立つことを夢見て。

一方で、戦時にはモダニズム建築を排除すべきという主張も。建築学者・星野昌一(1908-1991)は、窓ガラスばかりの国際様式を真似るのは利敵行為だと非難する。「防空的に脆弱なる立面は破棄せられて、これに代わる堅実な、しかも適度な採光、通風を失わぬ新しい立面が防空的立面として登場すべき」だと主張した(「意匠・計画と防空」『建築雑誌』1942.12)。

とはいえ、RC造の不燃建築が近隣住区理論に沿って計画されるなんぞ夢物語。現実は既存木造住宅の密集街区とあって、外壁にモルタルを塗る「木造家屋防火改修」がやむを得ず採用される。これもまた、火災実験の成果をもとに木造の弱点克服を試みた〈木造革新〉だけれども、あくまで応急的な対応策でしかなく、厳しい戦時のリアリズムを思い知らされる。

そして戦況はさらなるリアリズムを突きつける。「正しいものと正しくないものとを率直に篩い分け、国家の前進にとって役に立つものと役に立たないものとを仮借なく区別」するのが戦争の本質(大河内一男)。そんな取捨選択という思考実験の末、木造住宅の戦時動員は「建物疎開」に行き着く。つまり、不燃都市実現のために建物を間引くという悲しい結末へと。

「創造的代用」というレトリック

木造建築の合理化・工業化を推し進める〈木造革新〉。なかでも応急策として採用された「木造家屋防火改修」は、内田祥三・祥文父子や建築防火研究の泰斗・浜田稔（1902-1974）らによる提案で、要はRC造の「代用」としての外壁モルタル塗だった。国際的に孤立する日本にとって資源不足は死活問題。建築界においても木造建物建築統制規則（1939）などによって各種建築資材の配給が開始され、鉄筋は竹で、カーテンレールは段ボールで作られた「代用建材」が続々とあらわれる。

そんな状況にあって代用物資を「創造物資」と言い換える提言も登場する（川本鈞一「創造物資と意匠」『建築雑誌』1942.12）。物資制限は「条件束縛や制約ではなく、むしろ創意と創造への直接の火花ともなるべき契機」であり「新しい様式の樹立」をもたらすのだと。危機も好機に転用される。

〈木造革新〉のもう一つの例に挙げられるのが「新興木構造」。戦争の長期化に備えて資材統制が進むなか、短小木材をつなげることで、木構造でありながらも格納庫や工場などの大空間を実現する技術。そんな「新興木構造」を巡っては、伝統と科学の統合を目指す「語られ方」が観察できて興味深い。

「我が国民程木材を愛し、之を活用し、且天才的技術によって、美しい建築を産んだ国民は他に例を求める事は出来ない」けれども、「習慣的な従来の木造技術に対し厳正なる科学的批判の眼を向くべき」という語りは、木造建築の近代化と日本精神の合理化をも重ね合わせていく。こうして〈木造愛国〉と〈木造亡国〉の対立は「創造的代用」を契機にしつつ、〈木造革新〉へと収斂していく。

「新興木構造」は雑誌掲載も相次いだ。『建築と社会』（「木造建築の将来」特集、1930.7）、『建築世界』（「大張間架構特輯」1938.1）、『新建築』（「木構造特輯」1938.7）と続き、翌年には『建築雑誌』に「新興木構造の話」(1939.5)掲載。『新建築』では「新形式木構造特輯」(1943.2)と題し一冊丸ごと「新興木構造」。単行本では、宇賀神行一『新興木造建築』(1940)、堀口甚吉『新興木構造学』(1941)が出版。単発の記事、論考、資料は数えきれず、木構造研究はまさに黄金時代。「創造的代用」のもと木造建築は大いに動員された。

当然に〈木造革新〉の隆盛は〈木造亡国〉の退潮と並行するのだけれども、興味深いことに〈木造愛国〉さえも下火になり、〈木造革新〉を象徴する資料・データの掲載が増えていく。その顕著な例が終戦間近の雑誌『建築世界』。「特殊木構造特輯」（1944.4）と題する誌面は、施工写真と図表で埋め尽くされた。もはや、戦時下日本の状況は「役に立たない」理屈をこねてなどいられない非常事態にあった。

金色（こんじき）の野に降り立つ者

1946年春。一面褐色の焼け野原を眺めた建築家・岸田日出刀（1899-1966）は、「あーきれいだ、絵画的だなー」と不謹慎にも思ったことを書き記している。乱雑なまち並みにウンザリしていた岸田にとって、この焦土は都市復興への広大なフィールドに見えたのだろう。それは内田祥文が夢見た「爆撃するのをためらうぐらいの美しい都市」の建設予定地でもあった。ただ、内田は敗戦前後の過労がたたり、32歳でこの世を去る。

生前の内田祥文が書き上げた著書『建築と火災』（1942）は敵国による焼夷弾爆撃からいかに木造密集都市を防衛するかについて、身を粉にしてまとめたもの。木造建築を巡って、いかに効率的に焼き払うかを検討するアメリカと、どう防衛するかを模索する日本の戦い。急ピッチで行われた木造家屋の防火研究に裏付けられた〈木造革新〉のうち、最も現実路線だった応急策・外壁モルタル塗は思いのほか使い勝手がよく、戦後になっても大活躍。都市住宅はモルタル外壁で覆われる。なんとも皮肉なことに、一面焼け野原という「金色の野」に降り立ったのは、首都東京のル・コルビュジエ化ではなく、モルタル外壁で覆われた擬RC造の群れだった。後年、防火改修の生みの親・内田祥三は「木造モルタル塗構造はやめてしまったほうがいい」と嘆いたという。これもまた戦時動員の爪痕だ。

もう一つ後日談。戦時下の「代用建材」は、戦後復興から高度成長を支えた「新建材」開発の下地となった。川本鈞一の詭弁とも聞こえる「創意と創造への直接の火花ともなるべき契機」、「新しい様式の樹立」といった論理は「新建材」として結実し、戦後に花開いた。そして「国民住宅」は、戦後の建築課題として浮上する「庶民の持ち家＝普及版木造住宅」を方向づける役割も果たす。「創造的代用」というレトリックとともに。

ところで、モルタル塗りや石積調サイディング（＝擬RC）、化学的加工を施された新建材（＝擬木）で覆われた木造住宅の姿は、「高成長様式」（東樋口護）と揶揄されることになる「日本の家」の特徴だ。つくりもののなかに自然さを見出す日本的感性が「代用」をテコにして「木目調（であればヨシ）の美学」につながったとすれば、戦時の〈木造革新〉はハウスメーカーによる商品住宅登場へ向けた露払いだったと言えなくもない。さらに言えば、1945年以降の建築と暮らしを象徴する「日本の家」とはミサワホームなのかもしれない。

たけうち・こうじ｜専門は日本近代建築史。木造住宅メーカーでの実務経験から得た問題意識をもとに、戦時から戦後にかけての住宅計画・生産・供給、わが国における住宅産業の歴史などについて研究している。主な論文に「建築家・内田祥文の「國民住宅」構想に関する研究」、「イラストレーター・真鍋博の未来都市観に関する研究」などがある。

JIA 建築家大会 2017 四国

阿波おどりの国 とくしま大会

2017.9.28(Thu)―2016.9.30 (Sat)

シンポジウム「建築×子どもたち」

9月29日の11時から12時半まで、徳島のあわぎんホール4階会議室にて「建築×子どもたち」シンポジウムが開催されました。私たち「JIA東海支部子どもの建築学校委員会」は、シンポジウムを主催し運営する立場にあったため、前夜23時50分にレンタカーに乗り合わせて出発しました。午前8時半に会場を訪れると、すでに準備が始まっており、お願いしてあった通りに設営してありましたが、委員からもっと前に詰めようとのことで急遽レイアウトを変更。メディアチェックや登壇者との打合せなど怒涛の2時間半が過ぎ、いよいよ開幕、まずは車戸東海支部長の挨拶から始まりました。

シンポジウム後の集合写真

JIAゴールデンキューブ賞学校部門優秀賞・岡田慎さんの発表は、動機づくりからの経過を、種を蒔くだけでなく丁寧に丹精するさまが紹介され、まさしく人づくりに直結する建築教育のすばらしさを感じました。

組織部門優秀賞 西野雄一郎さんは、学生・地域住民を巻き込んだ、ものづくり・ことづくり・地域づくりを発表し、学生・地域住民が相互に作用し合うさまや、生徒にスイッチが入る瞬間がこちらにも伝わり感動的でした。

出版物部門優秀賞・高増佳子さんの発表は、建築リテラシー(建築を体験し、感じる力、表現する力、発信する力)に、構築する力を足した建築の本質に迫る取り組みだと感じました。

視聴覚部門優秀賞・赤木洋さんの発表は、その土地に過去から未来へと連綿と流れるものの結節点を子どもの力を通じて描いたもので、映像でありながら建築的な取り組みと感じました。

子どもの建築教育は欧米では建築家の役割として認知され、プログラムも開発されています。一方で日本では確立されていない分、多様な取り組みがあります。シンポジウムを通して、実践活動の発表や交流の場がとりわけ重要であることがわかると同時に、子どもの建築教育が建築のこれからの可能性であることを実感しました。

関口啓介 (JIA愛知) | 人建築事務所

全国住宅部会連絡会議

毎年2回開催される全国住宅部会。全国大会に合わせて、今回は徳島市での開催となりました。今大会のテーマは『建築家と土着』。われわれも同様のテーマで語り合うことになりました。住宅模型展も併せて開催し、愛知地域会からもいくつかの模型を展示させていただきました。

『土着』というテーマは少し抽象的で、話題として取り上げる難しさもあるのですが、それぞれの地域で何気なく設計に取り入れたり配慮したりしていることがあるはず。そこに土着性、グローカル性がすでに表れているはずです。

会議の様子

関東甲信越支部は、非常に寒い地域と温暖な地域があり、気候域が広範囲で、確かにそれぞれに配慮していることが多々あるそうです。近畿支部においては、川の氾濫が家づくりに影響を与えているのではという話がありました。東海支部からは、『土』の文化を挙げました。焼き物が盛んであることはそれを反映しています。

中国支部からは、まちづくりにおける土着性が語られました。四国は土佐派の家づくり、関東は狭い土地における家づくり、東海は三洲瓦・タイルの文化、それらは何気なく普通に使われているので、土着性を意識していないのではないかとも。

また、土着性に絡み、今後の省エネルギー性能についても話題になりました。国の指針は、日本中にすべての規定を当てはめようとしますが、地域ごとに気候は異なるわけで、その気候風土を環境性能に反映していくことが重要です。やみくもに高気密・高断熱を目指すのではなく、地域性を反映した土着的な住宅においても省エネ法の評価ができるようにしていくことも今後の住まいづくりに必要ではないかと思います。時間的な関係で、なかなか総括しきれないで終わりましたが、とても有意義な意見交換ができました。次回の会議も、今からとても楽しみです。このような活動に参加していくことで、住宅設計の意義と、これからの動きを考える機会になっていくと思います。

宮坂英司 (JIA愛知) | アトリエ創

剣山集落エコツアー+環境シンポジウム+環境会議

シンポジウム開催に先駆け、大会基調講演司会の布野先生もお招きし、登壇者および環境会議メンバーによる剣山集落エコツアーが27日に現地泊まりがけで行われました。ツアー解説は、Uターン（厳密には祖母の田舎）現地農家でシンポジウムパネラーでもある中島氏（元、原子核の研究者）と11代続く徳島の農家、東京から来た地域おこし協力隊の若者3名です。彼らの土着ラブのとても熱い現地解説および問題定義は長いバス道中とどまることを知らず、ツアー参加者の建築家重鎮たちによる「田舎に溶け込むのは大変だろう」などの質問にも毅然と自分の生きた言葉で自信を持って答えていたのが印象的でした。集落の人たちによる現地農産品のおもてなしも堪能し、気候と風土を体感。宿でも遅くまで議論し、翌日のシンポジウムに満を持して臨むことになりました。

最大斜度 40 度を超す剣山集落ツアー

シンポジウムは前半に先の中島氏のほか、建築と土木の若手研究者、企画者である徳島の建築家新居（にい）氏の計4名による個別発表。後半は岩崎氏の講演に続いて、中村勉氏、小玉氏、新居氏を交え4名による討論という構成で、ここでも若手vs.重鎮という構図が仕組まれていました。決してノスタルジーだけではない土着暮らしの各種データ解析や合理性の紹介から、地球規模の搾取の構図を何とかしないと、というグローバルな岩崎氏の話題まで、環境という分野の幅広さに焦点が拡散することなく、次のアルカシア東京や次の世代、次の過疎問題をどうしていくかのヒントが満載のシンポジウムだったと思います。その後、会場に居残りですでに燃え尽きたかのような環境会議が静かに行われました。また、布野先生には環境シンポジウムの他にAIと防災も傍聴していただき、最後に基調講演でまとめていただくという長丁場シナリオで、本当に大役お疲れ様でした。

ツアー+シンポジウム+環境会議後の懇親会

今でもメールが飛び交っています。剣山は何だったのかと。そして集落でおもてなししてくれた女性と中島氏のご結婚の報がたった今。次につながりそうです。

柳澤　力（JIA 愛知）｜
柳澤力一級建築士事務所

JIA 保存再生会議

初代議長のJIA近畿支部の石井和浩氏は金沢大会の後この世を去ったが、彼の熱い想いは今もなお脈々と全国の会員によって伝えられている。彼と初めて会った頃私は登録有形文化財に携わるヘリテージマネージャー（以下、ヘリマネ）や、名古屋歴史的建造物保存活動推進員（歴まちびと）として、JIA東海の中では異端とされる活動を始めていたが、「JIA保存再生会議」の全国ネットワークを構築しようとしていた時期でもあった。JIA会員が得意とする「近現代建築」の分野で文化庁と協力し、修復塾卒業生と連携しながら建造物の「保存」「再生」活動を通じストック活用を求めていくのが主な目的である。こういった活動は全国のヘリマネ協議会などでも個々に行われているが、全国組織のJIAならではの「連絡」と組織の枠組みを超えた社会との「連携」も求められる。ただ東海支部においては「保存・再生・活用」活動（運動）が皆無に等しく、全国に発信する情報に乏しいのが現状である。修復塾卒業生もわずか3名というのも甚だ悲しい限りのデータで、東北や関東、九州などとは比較にならない。あるシンポジウムで耳にした言葉で印象に残っているものがある。「この地方の人は新しもの好きで古いものに愛着がない」。確かにごもっともな説で、この支部の会員から近現代建築や歴史的建築の「保存」「再生」といった言葉を耳にしたことがない。会員が興味を示すためには何をすれば良いのか模索する日々だが、全国会議でひとつヒントをいただいた。それは「CABE」。詳しい内容はここでは控えるがJIA会員には一番ピタリとくるものではないかと考える。また建築の専門家ばかりではなくいろいろな分野の専門家も交えた専門家集団の組織化の構築も必要と考え、現在他の団体（歴まちびと）でNPOを立ち上げるところである。最近モヤモヤとした曇天ばかりであったが、少し晴れ間が見えてきた感がある。ここでJIA会員として如何に住み分けるのか、世間からあまり好感を持たれていないJIA会員の正念場と考える。

会議の様子

原　眞佐実（JIA 愛知）｜
原建築設計事務所

第34回 JIA 東海支部設計競技　1次審査結果

テーマ「21世紀の戦後住宅」

2017年10月21日（土）TOTO テクニカルセンター名古屋 プレゼンルームにて開催

応募総数　32作品（一般17、学生15）

●2次審査対象	「戦後住宅の壁」	前田真里・他1名（名城大学4）
	「浄化町に棲まう」	筒井　伸・他2名（信州大学4）
	「FREE ADRESS HOUSE」	山下陽輝（大同大学4）
	「軍港住居」	小澤巧太郎（東京大学大学院M1）
	「記念碑住宅」	森　亮太・他1名（名城大学4）
	「多国籍化する居室」	平野晃平（京都大学大学院M1）
	「小さな家の大きな暮らし」	西川公貴（金沢工業大学大学院M1）
●奨励賞	「The terrain of war」	中島生幸（九州大学4）
	「戦後に咲く花」	内藤卓郎・他2名（北九州市立大学3）
	「2×××年 未来型最小単位住居」	中田智徳・他1名（工学院大学3）

■審査員（順不同・敬称略）＜○：審査員長 ◎：ゲスト審査員＞
○西沢大良（西沢大良建築設計事務所）、◎大西麻貴（o + h）、栗本真壱（栗本設計所）、塩田有紀（塩田有紀建築設計事務所）、水谷夏樹（愛知淑徳大学）、南川祐輝（南川祐輝建築事務所）

1次審査を終えて

今年で34回目を迎えるJIA東海支部設計競技のテーマは「21世紀の戦後住宅」です。審査は10月21日（土）、昨年と同様、大名古屋ビルヂングのTOTOテクニカルセンター内プレゼンルームにて、審査員長の西沢大良氏、ゲスト審査員の大西麻貴氏をはじめ6名の審査員で行われました。大変興味深いテーマだったせいでしょうか。北は北海道、南は九州と全国から応募がありました。参加者も17歳から51歳と幅広い年齢層でした。ただ少しテーマが難しかったせいか昨年より応募案は少なかったです。1次審査の審査方法は2段階で行われました。1ラウンドは各審査員が最大7作品を選ぶことができ、1つでも○のついた作品は2ラウンドに進みます。2ラウンドに残った作品は一作品ずつ審査員全員でじっくり議論していきます。結果残った作品ですが、○の数最多4つの作品が脱落したり、○の数が一つでも「この作品のプレゼンはぜひ聞いてみたい!」という審査員の希望で作品が残ったりとなかなか先の読めない展開になりました。

幅広い年齢層を反映してか、アイデアもさまざまなバラエティに富んでいましたが、不思議なもので審査の経過でいくつかのバリエーションに収束していきました。公開2次審査に残った作品は分類されたバリエーションの中で特に優秀な作品、個性的な作品が選ばれたという印象を受けました。第31回から社会性・時事性をテーマにするようになったJIA東海支部設計競技ですが、今回の戦争という重いテーマの中、どの作品が各賞に選ばれるか非常に興味深いです。

寺下　浩（JIA岐阜）｜スマイロ・アーキテクツ・ユニット

審査風景

第一回建築ウォッチングに参加して

私には茶道の心得がない。しかし建築を志した50年程前から日本建築が好きで、特に数寄屋（茶室）建築の持つ空気感に強く惹かれていた。

熱海に産まれ、この地で40年間も建築設計の世界に没頭していながら、灯台下暗しで、初めて東山荘の門をくぐった。時間をつくっては日本建築、特に数寄屋風建築を見て歩いていた自分には、東山荘から新鮮な発見は見出せなかった。しかし、この建物には自分を強烈に惹き付ける魅力が感じられた。

私が一番好きな和風建築に、京都の「都ホテル佳水園」がある。20年以上前、貧乏建築家が一念発起してそこに宿を取ったのだが、憧れ続けた初恋の女性（佳水園）が、やっと会えたときには病に伏せていたという状況で、維持管理が悪くて非常に落胆したのを覚えている。そのとき建物は生きているんだな……と実感させられた。

東山荘

東山荘庭園

黄金の茶室

京都の中村外二工務店の升田志郎棟梁が、「建物はつくって半分、その後が半分」というようなことを話しておられたと記憶しているが、東山荘からは、「その後の半分」を今も完成に近付けようとする息遣いを感じて、私には感動的な出会いだった。

昼食後、バスで次の見学地であるMOA美術館に向かった。こちらは東山荘とは対照的に、若い頃美術の道を目指していた自分にはお気に入りの地元施設で、幾度となく訪れている。最近リニューアルをして建物は少し装いを変え綺麗になっていたが、私は少し違和感を覚えた。収蔵品を大切にする想いは理解できるが、その想いが強いためなのか展示品を奥の座敷へ移してしまったようで、大らかで開放的なロケーションの中、伸びやかで健康的な美しさを展示品から感じていた自分には、美術品の価値とは違う、対峙したときの爽やかな喜びが薄れてしまったように感じ、少し寂しくもあった。

美術館は好きでよく足を運ぶが、MOA美術館のように幾度も訪れていると、多くの知人たち（展示品）に会いに来ているようで、お気に入りのところではゆっくり時間を共有し、それ以外の知人（展示品）には会釈程度で済ませてしまう自分がいる。建築設計の世界にも通じるマンネリ化の怖さを再認識する時間でもあった。一方、JIAの会員さんたちの展示品と対峙している姿を拝見していて、自分も初心に戻って貪欲に展示品から新たな刺激を得る努力をしなければ……と教えられた。

その後、水晶殿を拝見させていただいた。専門の建築家でない美的感覚の鋭い一個人が設計したというお話しを伺い驚嘆する。中央に座らせていただき、ふるさとの広大な風景を眺めていると、忘れてしまった大切なことに気付かされる。長い年月建築設計の世界に生きていると、いつの間にかヘドロのように溜

MOA 美術館

水晶殿

まってしまった中途半端な知識やこだわり、そして安易な手法への逃避へと走ってしまいがちだ。ほとんど知識のなかった若い頃のように、理想と情熱だけで現実離れした計画に闇雲に挑戦していた時代の楽しさが甦って来るようで、眼下のふるさとの風景から励まされているような幸せな時間を持つことができた。

JIAの建築ウォッチングは本当に楽しい。常日頃色々な建物を拝見させていただくときには、自分の価値観や視点だけに頼り、自分の感性だけで、その建物から得られる多様なものを消化吸収する努力を試みている。しかし、JIAの建築ウォッチングでは、先人たちや先輩建築家、そして若い世代の価値観や視点に触れる機会が多く、いつも新たな発見がある。独りよがりになってしまっている自分への教示や反省を、促してもらえる有意義な機会だとあらためて実感できた。

建築家は知識を積み重ねるだけでなく、知識を育てていくものだとあらためて確認した有意義でとても楽しい一日だった。

秋山　元（JIA静岡）｜
秋山建築設計事務所

JIA愛知 建築家フェスティバル 2017 2017.10.14 Sat ~2017.10.15 Sun

開催に寄せて

えびす祭りの中で第5回目となる、JIA愛知建築家フェスティバルは、昨年同様、事業委員会を中心に、横断的に複数の委員会と一体化して取り組みました。

久保田地域会長が目指す、「オールJIA愛知で、輝くJIA愛知を！」の言葉を噛みしめながら市民や行政などに広くアピールし、賛助会の協力も得て公益社団法人としての市民交流体質を披露しました。昨年に続く杉間伐材活用には、高木委員長を筆頭に7～8人で新城市の三河材の流通業者に、間伐材の買い付けに出向き、一寸（30㎜角）格子造形ワークショップを発案した関口会長補佐が、材のつなぎにゴムを用いた試作を役員会で披露。森総務委員長の、中心に支持材のないウイッシュツリー提案と、沸騰するエネルギーと発想に、昨年より昇華した創造性・芸術性を感じました。来場いただいた多くの市民の皆さんが、子どもたちと一緒に、一寸格子の20面体に触発されながら、割り箸や一寸角材で、立体に挑戦した記憶は、原風景として将来、建築創造へと導いてくれると確信しました。次への期待は昂ります。

田中英彦（JIA愛知・地域会長補佐）｜連空間都市設計事務所

上｜建築家フェスティバルの集合写真　下｜ワークショップ会場

一寸格子造形ワークショップ

「長者町ゑびす祭り」での造形ワークショップも今年で4回目。今回は新たに「一寸格子（いっすんこうし）」を使ったワークショップに挑戦しました。

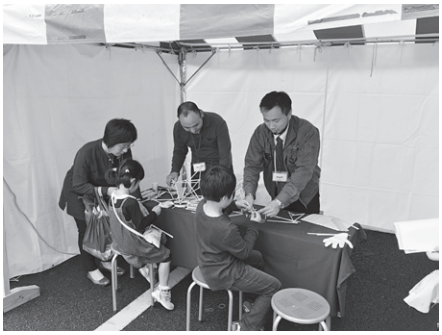
「一寸格子」とは一寸角（30mm×30mm）長さ1820mmと910mmに加工した愛知県産の間伐杉材のことで、ゴムバンドで結合しながら立体的な造形物をつくるものです。参加する子どもたちには最初に割り箸でミニスケール版を製作してから、いざ一寸格子で空間造形体験してもらうというプログラムです。

初日は曇り空ということもあってか、一寸格子まで作業が進む子どもたちは少なく、割り箸による造形体験に集中する子が多かったようです。付き添いの大人も一緒になって作業に没頭してしまう光景も、こういったワークショップではもはや風物詩です。今回は使用ツールが割り箸ということもあり作品は持ち帰り自由としました（昨年まではお断りしていました）。JIAの紹介を目的としたJIAカードとともに良いお土産になったのではないでしょうか。

2日目は残念ながらの雨模様。一般参加者は少数でしたが、われらJIA会員の創造活動は力強いものです。赤青緑の布やビニールシート（養生用シート）を調達し、骨組みだった「一寸格子」の二十面体・東屋を、シンボルオブジェ・射的場・JIA Caféサテライトなどへと昇華させていきました。晴天ではできなかったであろう刺激あるインスタレーションの場となりました。

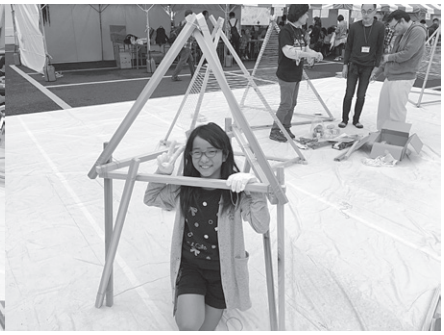
次回は針を刀にして戦う一寸法師の如く、「割り箸」造形を「一寸格子」空間に高めていく子どもたちの姿を期待することにしましょう。

上原徹也（JIA愛知）｜ファンズマイル／上原設計



建築教室

一寸格子造形ワークショップの様子



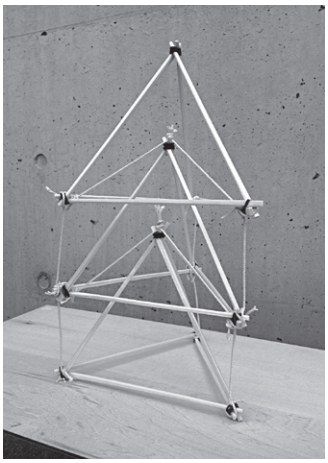
雨の日の一寸格子

Wish Tree

短冊を飾るインスタレーションは昨年から始まりました。発端には、「まちや建築に対する市民の声を聞きたい」という想いがあります。昨年のJIAパビリオンでは、河村市長も含め780枚もの色鮮やかな短冊が飾られました。また短冊は想いを書き記すとともに、飾るという行為も大切なことだと知りました。

今年も一寸格子と銘打った木材で「Wish Tree」を設け市民交流を図ることに決定。企画会議では、実寸の一寸格子の正四面体を囲み、さまざまなアイデアが出されました。正四面体を浮かせながら3段積み上げ樹形とし、周りに毛糸を張り、そこに赤色、柿色、山吹色の短冊を飾り葉に見立て、紅葉した樹木をつくり上げることになりました。

ツリーの幹は木材を束ねる予定でしたが、割り箸で試作をつくると別のアイデアが浮上しました。頂点と上部の正四面体の下部頂点を縄で結び引っ張ると立体が浮き上がります。周囲の頂点の上下を結ぶと立体が安定し積み上げることができます。精度が良ければ何段でもできそうです（言葉では説明が難く写真をご覧いただければと思います）。



「Wish Tree」試作

「Wish Tree」とワークショップ会場

ツリーは皆さまの協力や関口地域会長補佐のロープワークに助けられ無事完成！今年も短冊には、願い、誓い、感謝、そして言葉にならないアートのような絵？ などが数多く集まりました。また大村知事の訪問もあり、お言葉をいただくこともできました。いつしかこの企画がJIAのものと周知され、市民にまちや建築への想いを記してもらうことが細やかな願いです。

森　哲哉（JIA愛知）｜森建築設計室

JIA Café

本格的な道具とチョコレートの香りとグリーンアップルの風味のコロンビア産の豆を使って淹れるこだわりのコーヒーと、ウイスキーと生クリームが入って風味豊かなアイリッシュコーヒーを提供。

東海支部幹事長矢田氏の指導のもと豆の量と時間を計りながら美味しく味わいの深い入れ方を伝授してもらい、一寸格子造形ワークショップや「Wish Tree」に参加の方々に、子どもたちの真剣に遊ぶ姿を見守りながら、ホッと一息ついてもらえました。

本格的なコーヒーの味に気づいた方やJIAカードを受け取った方は、このような活動に興味をもって質問をされたり、カードのQRコードをかざしたりしていました。

JIA Café

その中には、常連さんも見えて昨年の組手什（くでじゅう）やダンカードにも参加され、「違う駐車場でのダンボール迷路も面白かったね」と初回のイベントも印象深かったと話しかけられ、建築家フェスティバルの活動が記憶にしっかり刻まれていることを知り、毎年開催することの意義を感じました。

2日目は雨模様となり参加者が少なかったのですが、JIAメンバーの発想力で、新たに一寸格子を組立て、ビニールシートを使って素敵なJIA Caféサテライトが出来上がりました。

早速興味を持って席に座わりコーヒーを味わったのはCBCラジオのパーソナリティーの方で、建築家フェスティバルの取り組みに関しての取材とつながりました。雨を嘆くのではなく、ならば！ と建築家の職能が生かされたCaféサテライト。ぜひ来年は数パターンつくってお招きしたいと思いました。

川口亜稀子（JIA愛知）｜Liv設計工房

委員会の再編とミッションの見直し進む

本部理事　車戸愼夫

第244回理事会が2017年10月19日(木)の13時30分～16時30分まで建築家会館1階大ホールにて集合方式で開催された。出席者は六鹿会長以下、理事22名、監事2名、筒井専務理事、事務局2名。オブサーバー出席は森暢郎顧問、上浪寛総務委員会委員長、篠田義男JIA保存再生会議議長。鳥井久保総務委員会委員。欠席者はなし。

【審議事項】

1. 入退会承認の件(事務局)

1)新規入会希望者:正会員28名、準会員3名(ジュニア2名、学生1名)、協力会員(個人1名、法人5件)

2)種別変更希望者:シニア1名

3)退会希望者:正会員2名、法人協力1件　→以上承認

2. 委員会委員・全国会議委員委嘱の件(筒井信也専務理事)

①業務委員会委員

委員就任　岡本尚俊(関東甲信越支部)

②フェローシップ委員会委員

委員就任　上野　貴(四国支部)

委員退任　松田公彦(四国支部)

③教育表彰委員会

委員就任　松村哲史(関東甲信越支部)

委員退任　松永　基(関東甲信越支部)

④JIA災害対策会議委員

委員就任　松下　督(関東甲信越支部)

委員退任　中山信二(関東甲信越支部)

⑤財務委員

委員継続　高橋隆博(関東甲信越支部　3期目)　→以上承認

3.「アルカジア大会諮問会議」設置及び委員委嘱の件(筒井信也専務理事)

【アルカジア大会諮問会議委員構成】

三井所清典(公社)日本建築士会連合会会長

大内達史(一社)日本建築士事務所協会連合会会長

古谷誠章(一社)日本建築学会会長

尾崎　勝(一社)日本建設業連合会建築設計委員長

小林正美　明治大学副学長　→以上承認

4. 全国ヘリテージマネージャーネットワーク協議会への参加の件(篠田義男JIA保存再生会議議長)

歴史的建造物の保全活用の為、JIA組織を超えた協働の必要性から　→以上承認

【協議事項】

1. 近未来特別委員会組織編成について(森暢郎顧問)

- 近未来の―①設計環境や建築家像の研究、②JIA組織の在り方(対社会性、立位置、etc)の研究―について論点を明確にしてほしい。
- 会員構成の幅はもう少し広げるべき。経験あるアドバイザーが必要ではないか。
- レポートの提出で終わらず、JIA改革と発展の糧にしてほしい。
- これまでの同種の委員会の検討内容の総括と整理をし、そのストックを十分に活用してほしい。

2. 委員会の再編とミッションの見直しについて(上浪寛総務委員会委員長)

- 副会長のもとで再構築したい。

3. 正会員資格の準用基準について(上浪寛総務委員会委員長・発表鳥井委員)

- グレーゾーンの明確化。

4. アルカジア大会について(高階澄人アルカジア大会実行特別委員会委員長)

大会スケジュール及び大会登録費等についての中間報告

- JIA全国大会の自立性とJIAの国際化としてのアルカジア大会との連続性について再度考慮を。

【報告事項】

1. UIAソウル大会報告(高階澄人国際交流委員会委員長)

- メール配信とする。

2.「JIA建築家大会2017四国」について(野村正人四国支部支部長)

- 野村四国支部長からのお礼あり。資料メール配信。

3. 財務委員会報告(左知子財務委員会委員長)

- JIA公益事業活動助成(2017年度第2回募集)についてと会計に関する報告。
- 第2回目の募集あり。公益事業助成350万円分のうち120万円支出。残金230万円。
- 資料11-2はメール配信。

4. NPO建築文化継承機構報告(森暢郎顧問)

- 宮脇檀展報告　募金は340万円集まり、1500人が入場(建築家会館)

5. 建築家資格制度チラシ報告(吉田文男職能・資格制度委員会委員)

- 完成品はJIAマガジンに折りこまれます。

6. 活動及び業務執行状況報告(筒井信也専務理事)

①業務報酬基準(告示15号)改正について

②国土交通省・自治体・関係団体等の動きについて

③「建築設計業務委託の進め方」検討会・検討部会について

④「公共建築における発注関係事務に係る支援方策に関する検討」のフェローアップについて

⑤「社会資本整備審議会建築分科会」について

⑥多様な発注方式の関するJIAリーフレット素案について

- 6-①～③は取扱注意文書として配布がありました。やがて正式な文書として発表されます。

⑦第1四半期決算報告

メール配信とする。

⑧後援名義承認の報告(会長専決事項)

メール配信とする。

7. その他

なし

東海支部役員会報告

機関誌『ARCHITECT』誌上において、30周年記念特集の企画と同時に会員へのアンケート調査が、会報委員会から実施されることが決まりました。東海支部会員全員を対象に、JIAに対してまた機関誌に対しての質問が用意され、会員の意識を集計し来年の1月号に発表されることになっています。JIAへの所属意義、会員を離れる時期、会費の問題などJIAに対する設問と、機関誌『ARCHITECT』については、記事内容について、また現行の紙媒体に対する今後のあり方まで、JIAで活動する私たちの存在意義が問われる内容となっています。

本部広報委員会へ東海支部広報委員として出向いていたころ、各支部の広報媒体を発表する機会が与えられました。全国ほとんどの支部はWEB配信に移行されていて、いくつかの支部は紙媒体ではありましたが、毎月発行している支部は東海支部のみだったと思います。本部に保管されているARCHITECTをその席上で各支部に回覧されたとき、周囲からお褒めの声をいただき、会報委員会の皆さんにこのことは伝えなくてはと感じました。

経費上、または利便性の問題だけで結論を急ぐことなく、機関誌『ARCHITECT』はこの形で存続されることを切に願っています。

江川静男（JIA静岡）｜ヴァイスプランニング

日　時：2017年10月27日（金）16：00～18：00
場　所：JIA東海支部事務局　会議室
出席者：支部長、本部理事、幹事11名、監査1名、オブザーバー6名

1. 支部長挨拶

前回の支部役員会から一カ月以上空いたが、先ずは9/15支部大会はありがとうございました、また全国大会もご苦労さまでした。

2. 報告事項

(1) 本部報告

①CPD評議会（9/22）（豊田）

1.CPD-WG合同拡大会議において

・ビデオ講習などについて、認定基準の見直しなど意見交換が行われている。

②本部職責委員会（9/27）（小田）

規定類全般について

・「会員」は「正会員」に、また「社団法人」は「公益社団法人」に修正する。

建築家憲章について

・「JIAが会員の質を保障する」との文言は改定する。

苦情処理に関する規定について

・「調停申立」など、苦情を受け付けないとした案件でも、事情を勘案すると受け付けざるを得ないケースもあり、すべての場合において「原則として」を入れることとする。

③フェローシップ委員会（10/5）（谷村）

JIA建築家大会2017四国　全国地域会長会議について

・今後は、地域会長同士の議論ができるよう構成を考えたい。

ウェルカムオフィスの報告

・広報、告知の仕方など、増強するためにも周知の方法を考えるべきなど意見が出ている。

フレッシュマンセミナーについて

・今年は2/24～25に金沢にて行うことに決定している。

④「告示15号」意見交換会（10/10）（小田・車戸）

・大規模建築物に対する直線補完の見直し要求
・複合化建築物に対する対応のしかた
・住宅などの小規模建築物に対する対応のしかたなど、2018年度にアンケート調査の後2019年3月には告示改定版公示の予定。

⑤全国環境会議（柳澤）

2017徳島大会について

・全国環境会議、環境シンポジウムの企画・開催、剣山系エコツアーの実施などが行われた。

月例（建築会館JIA館会議室+WEB参加）

・当日、東海支部事務局会議室にてスクリーン視聴実験を行い、今後東京でのシンポジウム、講演会など視聴が可能であることが分かった。

(2) 支部報告

①ゴールデンキューブ賞特別委員会（9/12）（柳澤）

出版事業として冊子製作数300冊のうち、285冊が販売できほぼ完売となった。

② 子どもの建築学校委員会（9/28）（柳澤）

開催当日記名いただいた方だけで68名、会場は満席となり盛況だった。

③ 東海支部設計競技（9/26、10/16、10/21）（矢田）

応募作品は32作品のうち2次審査対象は7作品、奨励賞は3作品が選ばれた。

(3) 各地域会からの報告（各地域会長）

議　事

1.審議事項

①入会申込 正会員「岡野俊二」「小川和彦」「奥井康史」「中村慎吾」（久保田）　→承認

②事業報告「東海支部大会2017」（長尾）

参加者121名、レセプション参加者90名、その他事業報告を含め　→承認

③事業計画「ROKI Global Innovation Center –ROGIC- 小堀哲夫氏との現地見学会」

チラシに、支部地域会主催と打ち出したので支部事業とさせてもらった。また人数としては当初70名の予定だったが、最終的には150名、静岡県庁関係者10名の160名となった。（矢田）　→承認

④後援名義使用依頼

(一社)日本CM協会東海支部「2017年度CM講演会」（12/2）（矢田）　→承認

(一財)東海建築文化センター「開発許可制度研修会」（2/16、2/21）（矢田）　→承認

⑤アーキテクト新年広告について（矢田）　→承認

2.協議事項

① 会報委員会 アンケートについて（中澤）

機関誌『ARCHITECT』誌上で30周年記念特集として、JIAに対する意識・意見などを集計・掲載し、今後の支部運営の参考にと考えている。

②アーキテクト広告掲載について（矢田）

自然塗料のプラネットカラー（大阪）が冊子の裏面に広告をフルカラーで出したいとの話がある。

3.その他

①支部役員選挙について（矢田）

各地域会において提出締め切りは11/24（10：00）となっているので、必着でお願いしたい。

4. 監査所見

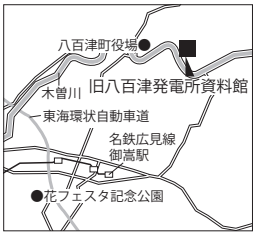
今、他団体も30周年を迎えているところではあるが、この3会の勢力も先細りとなりつつある。その中で、日本設計学会が3年前に関東圏を中心に立ち上げ、大きな勢力（360人程度）を保とうとしている。JIAとしても、この30年を機にこれからの展開を見据えていくべきと考えます。（鳥居）

データ発掘（お気に入りの歴史的環境調査）　旧八百津発電所資料館

北西外観

発電棟内部（右手は送電棟）

送電棟2階床下面のアーチ



■発掘者コメント

この建物は岐阜県八百津町にある旧八百津発電所で、木曽川水系初の本格的な発電所として明治44（1911）年に建設され、明治・大正・昭和の3代に渡って産業の近代化を支えてきた。9.7㎞上流から取水し、導水している水路式水力発電所（出力7,500kw）で、当時わが国有数の発電所であったという。昭和49（1974）年新しい丸山発電所の完成により閉鎖。平成10（1998）年に本館と放水口発電所が国の重要文化財に指定されたのを機に資料館としてオープンした。

壁はイギリス積の煉瓦造で外側はモルタル塗りの上に白色塗装、内側は漆喰塗りの上に白色塗装、窓枠は木製である。屋根は鉄骨トラス架構で現在は銅板葺きとなっている。

発電棟は放熱を考慮して軒高12mの広々とした空間となっており、巨大な水車と発電機を直結した発電装置3組と、上部に走行クレーンが1台設置されている。

隣接してつながっている送電棟は1階が母線室、2階が配電室であったが、現在は、八百津町のさまざまな資料の展示室となっている。この2階床はI形鋼を1m間隔に架け渡し、その間に煉瓦をアーチ状に積み込んだ防火床と呼ばれるもので、近代初期の重層建築に採用され、現存する例は極めて少ないという。

外観は四隅と要所に突き出たバットレス（控壁）と半円アーチ、円弧アーチ、矩形を大小組み合わせた窓や、パラペットの装飾などでデザインされている。単なる工場とは一線を画して、設計者の思い入れを感じることができる。惜しむらくは煉瓦積がモルタルで覆われてしまっていること（内側の漆喰壁も同様）であるが、それには何か理由があったのだろうか。平成17（2005）年には、近くの貯水槽、余水路の2施設も重要文化財に追加指定された。なお近くに杉原千畝記念館がある。

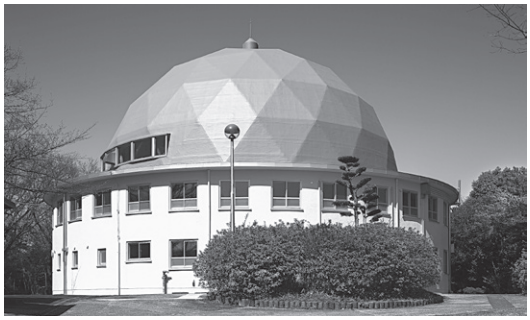
所在地：岐阜県加茂郡八百津町八百津3827-1
構造規模：発電棟｜煉瓦造銅板葺き平屋建て・建築面積826㎡　送電棟｜煉瓦造銅板葺き2階建て・建築面積475.3㎡
建設年：明治44（1911）年
設計監理：大藤高彦（京都大学・工博）
指　定：重要文化財　平成10（1998）年
参考資料：旧八百津発電所資料館
案内パンフレット「木曽川水力の歴史」
八百津町教育委員会2013年改訂版

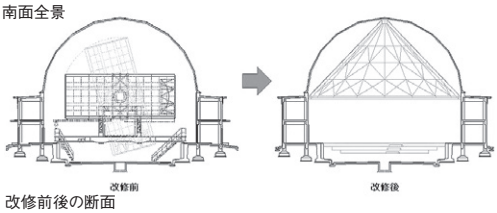
山上　薫（JIA愛知）｜
山上建築設計

データ発掘（お気に入りの歴史的環境調査）　名古屋大学 旧宇宙線望遠鏡室 現音楽練習施設

■発掘者コメント

宇宙線望遠鏡室は、外側の直径24mの円筒形平面に直径18mのドーム型屋根をのせた特徴的な形態を持ち、ドーム内に直径5m、長さ12mの双眼望遠鏡（通称、宇宙線望遠鏡3号）が設置された。空気チェレンコフ光を利用した宇宙線の観測設備として日本の宇宙線研究の黎明期を支えてきたという（参照:第21回名古屋大学博物館特別展　関戸弥太郎と宇宙線望遠鏡パンフレット）。その役割を終えた望遠鏡は2015 年に解体・撤去された。その後建築空間の有効活用策が検討され、学生の福利厚生の一貫として音楽系サークルの練習場として、学内経費によってリノベーションされた。ドーム部分の音響条件を改善するため、屋根内部に木でトラスを組んで16角錘とし、グラスウール・合板・遮音シートを用いて幾何状に張り分けている。中央の大空間は総合練習やイベントによる利用、ドーム外周部の2階建ての個室群はパート練習や小規模集会に供されることが想定されている。プロポーションは異なるが英国のグローブ座が想起される空間である。この形態は中央部に音が集中する傾向があり、さらに改造する検討がなされている。わが国でも科学技術遺稿の保存と活用の推進が図られるべきであり、その典型事例となることが期待される。


南面全景



改修前後の断面

合同音楽
練習室

所在地：名古屋市千種区不老町 名古屋大学東山キャンパス内
面積：約644 ㎡
構造：鉄筋コンクリート造
階数：地上2 階
建設年：昭和34(1959)年
改修年：平成28(2016)年
設計者：文部省教育施設部名古屋工事事務所
改修設計者：名古屋大学施設管理部、施設・環境計画推進室、中田捷夫研究室、長大アルコム建築部、明野設備研究所
施工者：大成建設
改修施工者：竹中工務店

谷口　元（JIA愛知）｜
名古屋大学名誉教授

21 世紀の戦後住宅

第 34 回 JIA 東海支部設計競技 2 次公開審査会

表彰式・作品展示・記念講演会

日　時　2017 年 12 月 2 日（土）

会　場　TOTO テクニカルセンター名古屋 プレゼンルーム 1・2
（名古屋市中村区名駅 3-28-12 大名古屋ビルヂング 13F）

スケジュール（予定）

◉作品展示（12:00 ～ 17:30）

◉プレゼン（6 名）（12:30 ～ 14:10）→
休憩（14:10 ～ 14:20）→公開審査（14:20 ～ 15:00）→
学生賞・ゲスト審査員賞講評（15:00 ～ 15:40）→
表彰式（15:40 ～ 15:50）→休憩（15:50 ～ 16:00）→
記念講演会（16:00 ～ 17:00）

定　員　100 名（先着順）

記念講演会講師　大西麻貴（一級建築士事務所 大西麻貴 + 百田有希 / o+h）

問い合わせ先

設計競技事務局

〒 460-0008 名古屋市中区栄四丁目 3 の 26 昭和ビル 5 階（公社）日本建築家協会東海支部内　TEL 052-263-4636　FAX 052-251-8495

主催・後援　主催：公益社団法人日本建築家協会東海支部
後援：一般社団法人日本建築学会東海支部

JIA 三重「建築文化講演会2018」

前田圭介講演会「郷土の根となる建築とは」

1 月 20 日開催

講　師　前田圭介（建築家・広島大学客員准教授）

日　時　2018 年 1 月 20 日（土）
13 時 30 分～ 15 時 30 分（開場 13 時 00 分）

会　場　アスト津アストプラザ 4F　アストホール
（三重県津市羽所町 700 番地）

定　員　270 人（当日先着順、聴講無料）

問い合わせ

JIA 三重事務局（HAGA 総合設計）芳賀信次

TEL 0598-21-5511　FAX 0598-21-5512

E-mail haga-s@sky.email.ne.jp

地域会だより

＜東海支部＞

9/15　JIA東海支部大会2017岐阜「水の力」
9/28 ～ 30　JIA建築家大会四国2017とくしま大会

＜静岡＞

10/14　建築ウォッチング（熱海）
11/1　10月静岡地域会定例役員会
11/17　建築文化研究会講演会　谷尻誠氏「意識のデザイン」
11/29　11月静岡地域会定例役員会
12/1　建築サロン開催予定
12/13　12月静岡地域会拡大役員会・忘年会

＜愛知＞

9/29 ～ 1/26　2017年度　名古屋市立大学講義
10/14 ～ 15　建築家フェスティバル（ゑびす祭りに参加）
10/28　JIA建築見学日帰りツアー
11/5　JIA日本建築大賞2016　現地見学会＆講演会
11/15　JIA建築セミナー
11/22・23　JIAバス研修（1泊2日）
11/27　JIA愛知第2回選挙管理委員会
12/8　JIA愛知役員会
12/13　JIA愛知賛助会役員会

＜岐阜＞

9/14　支部大会現地設営（16:00 ～ 18:00）
場　所：メディアコスモス会場
協力会員との交流会（支部大会前夜祭）（8:30 ～ 21:00）
場　所：さむしんぐ（イタリアン居酒屋）
10/11「JIA東海支部大会2017　講師を囲むお疲れ様会」場所：うを仁
10/25　岐阜地域会役員会（18:30 ～ 21:00）
場所：ハートフルスクエア第3研修室
12/8　岐阜地域会役員会＋忘年会（18:00 ～）　場所：おく田

＜三重＞

10/6　第6回役員会、第5回例会
11/11　建築ウォッチング「古き良き歴史を訪ねて　奈良・明日香村」
11/22　三重短大課題参加
12/1　会員研修4
1/20　建築文化講演会（前田圭介氏）

弔うこころ、大切な葬儀

葬儀のこと、お応えします。

一柳の葬儀は、各種・価格を段階的に用意いたし、
ご希望される予算に合わせてお見積りいたします。
宗教・宗派、葬儀規模の大小にかかわらず、
全ての葬儀に丁寧にお応えしています。

いちやなぎ斎場は、365日・24時間、
いつでも病院・施設等から直接入れます。

いちやなぎ中央斎場
名古屋市千種区千種二丁目19番1号
TEL(052)745-1212

いちやなぎ野並斎場
名古屋市天白区野並三丁目538番1号
TEL(052)899-0111

イチヤナギ倶楽部
●入会金1万円のみで掛金不要、基本価格の2割引と交通事故傷害保険の特典取得
●相続、遺言、後見制度など相談先の紹介が受けられます

◆葬儀のお申し込み◆お問い合わせ◆事前相談は
TEL.052-251-9296
365日・24時間 一柳のスタッフが対応いたします!

日本建築家協会東海支部 特約店
株式会社 一柳葬具總本店
http://www.ichiyanagi-sougu.co.jp

編集後記

●先日、「ふじのくに木使い建築カレッジ」という研修会に参加する機会があった。木材の生産、加工、流通などに携わる人と、建築設計者がワークショップなどを通して、戸建て住宅以外の建築にもっと木を使っていくにはどうしたらよいかを考えながら学ぶ機会であった。S造やRC造であれば、私たち設計者はどのような材料が流通しているかを知っているし、設計図で指定したものが手に入らないということはほとんどないのだが、これが木造となると状況はかなり異なると言える。流通材ではないものを使うとなると途端に値段がわからない、納期がわからないということになり、そのあたりの事情をリサーチする必要が出てくる。しかし、木は再生産可能な材料であるということからも木造でできるものは木造でやるというのは正しいと思うし、あと10年もすればそれが当たり前となっていると自分は考えている。中大規模木造が急速に広がりそうな今の時代について、将来振り返ったときどのような語られ方をするのだろうかということを想像しながら竹内先生の連載を読ませていただいた。

（石橋 剛）

●今号の保存情報は、かつて日本の近代化、科学技術を支えた重要な施設のその後の活用方法についての記事でした。旧八百津発電所資料館は国の重要文化財に指定されたことをきっかけに資料館として再開したそうです。建物自体も現存する重層建築としては大変貴重だそうで、産業の近代化を支えたという事実は風化することなく語り継がれていくことでしょう。一方の名古屋大学旧宇宙線望遠鏡室は建築空間を残し、内部を改装することで全く違う形で活用されています。50年以上も宇宙線研究を支えてきた施設が音楽系サークルの練習場になるとは思いもよらないアイデアです。しかし、こちらもそこに研究施設があり、研究を支えたという事実は残り、その歴史も語り継がれていくのだと思います。今後も日々進歩する技術革新に伴い、役目を終えていく施設は出てきます。その際の保存と活用、再稼働について柔軟な考え方が必要だと考える良い機会となりました。　（石川英樹）

ARCHITECT
第 351 号
発　行　日　2017.12.1（毎月 1 回発行）
定　　価　380 円（税込み）
発行責任者　車戸愼夫
編集責任者　中澤賢一
編　　集　東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部
名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703
TEL（052）971-7479　FAX 951-3130
発　行　所　（公社）日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄 4-3-26　昭和ビル
TEL（052）263-4636　FAX 251-8495
E-Mail：shibu@jia-tokai.org
http://www.jia-tokai.org/